

〔本朝食鑑〕燈火 附燈花燭火、保久知火、

集解○中著木者用栢木作片令極薄、片端塗抹水煉硫黃而晒乾移火、

〔守貞漫稿六業〕江戸ニ在テ京坂ニ無キ陌上ノ賈人、略○中附木賣、

金石ヨリ火ヲ出シ、火口ニ傳へ、再亦コレヲ附木ニ傳フ、則チ薄キ板頭ニ、硫黃ヲ粘シタル物ナリ、詞ニ大坂附木ト云、而モ大坂ト同製ニ非ズ、彼地ノ製ヨリハ柿幅廣ク、長サハ五六寸也、因云、江戸ニテ是ヲツケギト云、京坂ニテイヲント云、硫黃木ノ略歟訛歟、蓋七十二番歌合ニモ、ユワウウリアリ、帝ヲ兼賣ル、詞曰、ユヲウホウキ、然ラバ京坂ハ昔ヨリツケギト云ズ、ユワウト云シ也、

〔享保集成絲綸錄三十六〕元祿三午年正月

一木之附木、當午春、商賣不仕、麻がらの類ニ而拵、商賣可仕旨、去年被仰付候通彌木之附木一切商賣仕間敷候、若相背商賣仕候は、御捕被成、急度可被仰付候間此旨堅相守、少も違背仕間敷候以上、

正月

〔見た京物語〕付木をたち賣にする

〔浪花雜誌〕街迺噂三万松、大坂でも引越のときは、近處へ蕎麥を配リヤスかね、鶴人、イヘー江戸は蕎麥をくばりやすが、大坂では附木を一把ヅ、賦りヤス、大坂の附木は七八分位の巾に皆な切て束てムリヤス、それを一把くばる人もあり、二把くばる者もありヤス、

〔毛吹草〕大和付硫黃、和泉付硫黃

〔國花萬葉記一山城〕金銀竹木土石

硫黃木 稲荷社の前 伏見墨染ノ邊

〔續江戸砂子一〕江府名產并近在近國